江戸時代の宗教観と芸能の盛行

東北歴史博物館
笠原　信男

1　江戸時代の宗教観

（1）江戸時代の日本人

江戸時代に日本を訪れた欧米人は、彼らの習俗や思考様式、宗教観とは異なる世界、文字通りの異文化に触れ、時に困惑し、時に感動した。欧米の発達した近代工業化社会を当たり前のものとして受け入れ、その世界観に強い自負と少しの懐疑や反省を抱いていた彼らは、機械の助けによらない、近代以前の生活様式が高い完成度で到達していた江戸時代の日本を時に批判的に、時に好意をもって語っている。

在野の近代史家、渡辺京二は明治以降、西洋化したことによって消えていった江戸時代人の特性を、幕末から明治に日本を訪れた異人の眼を手掛かりにして記録した(1)。ここでは、当時の日本人の所作を外部の視点から見たい。

（ａ）箱庭的な風景

「(長崎県大村湾)切り立った山と海の景色から、肥沃な谷々のゆたかで緑濃い景観の連なりへと変わった。谷々は農作物がみち溢れ、ゆるやかな斜面からさして高くない丘の頂までひろがる米、麦、ライ麦、アブラナによって覆われていた。杉や樅に似た木が、黄金色に輝く自然のほほえみの中にみごとにはめこまれエメラルドのように点在していた。椿、バラ、さらにはあらゆる種類の常緑樹が、行く手に花房のように垂れかかり、その多くは舗装のよい広い道幅一杯にひろがっている。村人たちがあらゆる方角から現れて、好意のしるしを示すやら、お菓子とかお茶とか水を差出すやらしてわれわれを歓迎した。帰り途では大勢の女子どもが家の外に立っていて、われわれには花を馬にはまぐさを差出すのだった。今日は日曜なのかとたずねる者もいるし、金ボタンをせがむ者もいる。路の片側に寄って、あわてて跳びのく女もいる。乗り手ではなく、落ち着きのない馬をこわがって道を譲るのだ。そしてびっくりした様子で大笑いする」(2)。

（ｂ）ほほえみと陽気な笑い

「日本のほほえみは「すべての礼儀の基本」であって、「生活のあらゆる場で、それがどんなに耐え難く悲しい状況であっても、このほほえみはどうしても必要なのであった」。

「そしてそれは金であがなわれるものではなく、無償で与えられるのである。このようなほほえみ一後年、不気味だとか無意味だとか欧米人から酷評される日本人のてれ笑いではなしに、欧米人にさえその意味がわかったこの古いほほえみは、レガメが二度

目の来日を果たした1899年(明治32年)には、「日本の新しい階層の間では」すでに「曇り」を見せ始めていた」(3)。

「日本人とは驚嘆すべき国民である。今日午後、火災があってから三十六時間たつかたたぬかに、はや現場では、せいぜい仮小屋と称すべき程度のものではあるが、千戸以上の家屋が、まるで地から生えたように立ち並んでいる。・・・女や男や子供たちが三々五々小さい火を囲んですわり、タバコをふかしたりしゃべったりしている。かれらの顔には悲しみの跡形もない。まるで何事もなかったかのように、冗談をいったり笑ったりしている幾多の人々をみた」(4)。

（c）子どもの国

「日本人が子どもを大切にし、そのため日本がまさに「子どもの天国」の観を呈していることについては、観察者の数々の言及がある。だが実は、日本人自体が欧米人から見れば大きな子どもだったのである。若者たちが、いや若者どころかいい大人たちが、小さな子どもたちに交じって、凧をあげたり独楽を廻したり羽根をついたりするのは、彼らの眼にはまことに異様な光景に映った」(5)。

（d）分を越えない労働

「日本人の働き手、すなわち野良仕事をする人や都会の労働者は一般に聡明であり、器用であり、性質がやさしく、また陽気でさえあり、多くの文明国での同じ境遇にある大部分の人より確かにつきあいよい。彼は勤勉というより活動的であり、精力的というより我慢づよい。日常の糧を得るのに直接必要な仕事をあまり文句も言わずに果たしている。しかし彼の努力はそこで止まる。・・・必要なものはもつが、余計なものを得ようとは思わない。大きい利益のために疲れ果てるまで苦労しようとしないし、一つの仕事を早く終えて、もう一つの仕事にとりかかろうとも決してしない。一人の労働者に何かの仕事を命じて見給え。彼は常に必要以上の時間を要求するだろう。注文を取り消すと言って脅して見給え。彼は自分がうけてよいと思う以上の疲労に身をさらすよりも、その仕事を放棄するだろう。どこかの仕事場に入って見給え。人は煙草をふかし、笑い、しゃべっている。時々槌をふるい、石をもりあげ、次いでどういう風に仕事にとりかかるかを論じ、それから再び始める。日が落ち、ついに時間がくる。さあこれで一日の終わりだ。仕事を休むために常に口実が用意されている。暑さ、寒さ、雨、それから特に祭である。・・一家を支えるにはほんの僅かしかいらない」(6)。

「(横浜の運河に新しい海堤が築かれていた)働いている人達は裸体に近く、ことに一人の男はふんどし以外には何も身につけていない。（杭打ち機械の）縄を引く人は八人で円陣をなしていた。変な単調な歌が唄われ、一筋の終わりに揃って縄を引き、そこで突然縄をゆるめるので、錘はドサンと音をさせて墜ちる。すこしも錘をあげる努力をしないで歌を唱うのは、まことにばからしい時間の浪費であるように思われた。時間の十分の九は歌を唄うのに費やされるのであった」(7)。

（ｅ）江戸時代人の絶滅

アメリカの生物学者モースは、日本滞在中に記した日記を整理して『日本その日その日』を執筆し、1917 年(大正６年)にボストンで出版した(8)。出版は著名な美術研究家のピゲロウの勧めによって決意された。日本の腕足類等を研究したいというモースにピゲロウは以下のように説得したことによる。

「君は正直な所、日本人の方が虫よりも高等な有機体だと思わないか。腕足類なんぞは溝へでも棄ててしまえ。腕足類は棄てて置いても大丈夫だ。いずれ誰かが世話をするにきまっている。君と僕とが四十年前親しく知っていた日本の有機体は消滅しつつあるタイプで、その多くは既に完全に地球の表面から姿を消し、そして我々の年齢の人間こそは、文字通り、かかる有機体の生存を目撃した最後の人であることを、忘れないでくれ。この後十年間に我々がかつて知っていた日本人はみんなベレムナイツ(化石としてのみ残る頭足類の一種)のように、いなくなってしまうぞ」(9)。

モースはこの書で日本人が正直であることにふれ、また、「心の優しさ、高い道徳性、美しいものに対する洗練された感覚、自然を生かす知恵などを高く評価している」(10)。

（２）日本人は宗教に無関心

江戸時代の人々は、人には生まれながらの身分があることを当たり前としていた。とりわけ、支配階層の武士と他の階層には大きな隔たりがあったと思われるが、身分に応じた生き方を受け入れていた。

江戸幕府は制度の支柱として儒教の教えを重んじた。「仁・義・礼・智・信」の道徳を実践し「父子・君臣・夫婦・長幼・朋友」の人間関係を大切にすることで、社会の安定を図った。儒教は生きている人だけでなく、死後の霊にも大きな影響を残している。祖霊信仰などは現在では仏教に組み込まれているが、本来は輪廻を主眼とする仏教思想と相容れないもので、古来の民間信仰と儒教に由来する。一周忌、三回忌などの法事、位牌による先祖供養などの習慣は儒教起源である。思想、道徳、政治的規範としての儒学は支配階級を中心に学ばれ、明治時代以降は一般庶民にも直接、間接に影響を与えた。

しかし、儒教はいわゆる宗教ではない。一般的には仏教や神道が宗教と考えられるが、幕末から明治にかけて日本を訪れた欧米人は神仏への崇敬、寺社でのふるまい等について大きな違和感を覚え、多くの欧米人が日本人は宗教に無関心と見ていた。

「私の知る限り、日本人は最も非宗教的な国民だ。巡礼はピクニックだし、宗教的祭礼は市である」(11)。

「寺院の境内では芝居が演じられ、また射的場や市や茶屋が設けられ、花の展示、珍獣の見せ物、ベーカー街のマダム・タッソー館（イギリス・ロンドンにある蝋人形館)のような人形の展示が行われる。こういった雑多な寄せ集めは、敬虔な感情や真面目な信仰とほとんど両立しがたい」(12)。

しかし、このことは欧米のキリスト教をベースにした宗教観で日本人の宗教観を理解

しようとしたことによる。彼らは唯一絶対的な神との霊的な交わりによって、「個人の生活と社会のいとなみに、より高い精神的な水準がもたらされるものとして、宗教を理解していた」(13)。

寺社には「老女と子供しかおらず、老女が祈っている間、子供の方はお祈りや念仏が唱えられているというのに、大声をあげて遊び回っている」(14)。「知識人の間には、神道にも仏教にも与しない開けた日本人が数多く見出せる。彼らは外見的な神仏信仰を斥け、孔子の教えの規範に多少の修正を加えたものに従っている」(15)。「武士が仏寺に詣でるのは、友人の葬式か、物故した英雄や主君の法要の時以外、きわめて稀である」(16)。

キリスト教徒が教会で唯一神に敬虔な祈りをささげる姿をもって、日本人は寺院や神社に安置する仏や神様に厳かに祈りを捧げないと批判したり、仏教や神道の教義に日本人の宗教心を求めても、宗教心の刻心を突いたものとは言えない。むしろ日本人の宗教心の真髄は、迷信あるいは娯楽として、批判されたものにあった。迷信は「非常に広く普及していて、お守りとか何かの象徴を住居その他につけるのがごく普通になっている。病魔を遠ざけるために家の扉に蟹を釘で止めたりするかと思うと、好運の日、不運の日があって、船乗りは暦でどの方角を避けるべきか前もって調べた上でないと港を離れない」などである(17)。

これらの迷信は、この世を包含するさらに大いなる神秘の世界、神々の世界があり、そこと交感（心が通じ合うこと）・交歓（親しく交わること）したものとされる。この庶民の信仰の深部に最も接近した欧米人は、明治に来日したアメリカの女性教育者、アリス・ベーコンであろう。彼女は「村を見おろしている岩の頂上は天狗が作った」。「天狗はもうこの森から去って今はいない」。さきほど「山の神様の使いである大きな黒蛇が、いましがた、ここを通った」と説明する陽気な老女に接し、「神秘で不可思議な事物に対する彼女のかたい信念は、かしこい人々はとっくに脱ぎすてているものだけれど」、「すべての自然が深遠な神秘に包まれている文化のありかたへの共感を私たちの心に湧きあがらせてくれた」と評した(18)。

寺社で子供が大声をあげて遊び回っているのも神仏との交感・交歓と考えられるものである。寺社の祭礼に演じられる芝居、射的場や市・茶屋、花の展示、人形の展示は「神秘で不可思議な事物」との交歓なのである。参詣人は神仏と結縁した存在であり、日常の世俗の縁や絆から離れた非日常の場面で神仏と交感・交歓するのである。これが伝統的な庶民信仰を踏まえた寺社信仰の形となっていたのである。芝居や見世物などの祭礼の娯楽も、日常とは異なる人・ものとの交歓であり(19)、ふだんは顔を合わせない遠方から来た参詣人との食べ物等の交換も「神秘で不可思議な事物」との交歓といえる。

２　仙台城下の芸能ー特に芝居についてー

（１）操芝居と歌舞伎

操芝居は、一般に三味線で語る浄瑠璃に合わせて舞台で演じる人形劇のことある。今

日、一般には人形浄瑠璃のことで、現在では、唯一の人形劇団である『文楽』のことを意味する。これを江戸時代は操芝居または操浄瑠璃と呼んでいた。

安土桃山時代末期に琵琶等で語られた『浄瑠璃物語』、傀儡師による人形遣いが、新来の楽器である三味線と結びついて成立した。貞享元年（1684）、竹本義太夫が大坂道頓堀に竹本座を創設し、劇的な語り物としての義太夫節を確立し以後、義太夫節が浄瑠璃界の主流となった。義太夫節はそれ以前の単調な曲節による浄瑠璃と大きな開きがあり、明らかに一線を画するものとされ、竹本座旗揚げ以前の慶長から貞享年間までの浄瑠璃を古浄瑠璃といっている。義太夫節は諸派浄瑠璃の曲節のほか、謡曲、狂言小歌、平曲、説経節なども取り入れ、当時の音曲を集大成したもので、この語りに合わせて、元禄期（1688～1704）には近松門左衛門という不世出の作者による作品が演じられた。近松による人形浄瑠璃作品は歌舞伎にも移された。

大阪では芝居というと人形浄瑠璃が主とされたが、江戸は歌舞伎であった。江戸の芝居小屋は延宝の初め頃（1670 年代）までに中村座・市村座・森田座・山村座の四座が芝居小屋として認められ、山村座が正徳４年（1714）に取り潰されると、以降、官許の芝居小屋は三座となった。

（２）仙台城下の操芝居(20)

仙台城下では３人の役者が操芝居を行う権利を持っていた。これを三太夫といい、幕末の資料によると、「常盤大夫・長門大夫・加美大夫」で彼らは「六ケ所神事場へ晴天十日ツツ操リ人形芝居」の興行を順番に許されていた(21)。「六ケ所神事場」は「木下白山宮祭日三月三日・釈迦堂榴ケ岡四月八日・躑躅岡天神六月十五日・荒町毘沙門天六月朔日・大崎八幡宮八月十五日・東照宮九月十七日」である(22)。晴天時に 10 日ずつ、年６か所で行われたので、仙台城下で芝居を観る機会は年 ~~180~~ 60 日あったことになる。「六ケ所神事場」では芝居のほか、角力や小見世物も行われた。

現在のところ、三太夫は二代藩主伊達忠宗が承応３年（1654）に創建した仙台東照宮の明暦年中（1655～1657）の祭礼での興行をゆるされたとする史料が古いものである(23)。

「三太夫とも被免され候義は、御先代様崇敬の御趣意を以って、明暦年中三太夫相下され、東照宮御神事にて初めて芝居興行を仕り以来、渡世を相続仕り居り候儀に御座候（読み下し）」

当時、操芝居は祭礼以外でも藩主観覧の機会があった。４代藩主伊達綱村は貞享２年（1685）７月 16 日の盆中に、実弟で水沢伊達家を継いでいた伊達将監の屋敷（仙台市青葉区、現在の仙台国際センターあたり）を「午刻（昼頃）」に訪れ、盆行事として「（恐らく広瀬川の）川へ水遊（沐浴）ニ御出」、その後に「獅子躍・アヤツリ御覧」じて、「亥下刻（午後 10 時頃）御帰」とある(24)。

操芝居は一般的に人形浄瑠璃をいうが、仙台藩では操芝居と称して実際は歌舞伎を上演することがあった。いつから規制されたかはっきりしないが、表立っての歌舞伎上演

は仙台においては行われなかった。それで、役者が腰に人形の面を下げて、操芝居といって行った。この古い例は西暦 1750 年(寛延３年)頃である(25)。

「神社仏閣祭礼の賑わいの為、腰人形歌舞妓を御城下へ相免されしは、寛政十二年(1800)より五十年も前の事成る由、これは同年七十余才の老人の咄なり、寛政の初頃は右芝居の一切を留置れしが、同九年(1797)六月、毘沙門の祭礼より元の如く相免され候」

「腰人形歌舞妓」は、「はさミ人形」ともいい(26)、仙台藩で禁じられていた「歌舞妓/狂言」を上演する際に「人形芝居はかり御免ゆへ立物の役者腰に面をさけて申訳とす(意訳：(仙台では)人形芝居ばかりが芝居として許されているため、申し訳に役者の腰に人形芝居の面を下げて、歌舞伎を演じる」というものである(27)。

庶民が歌舞伎に熱中して、祭礼が無秩序になることを懸念したのであろうか、歌舞伎が爛熟する江戸時代中期、歌舞伎はいうまでもなく、「腰人形歌舞妓」もたびたび禁止と緩和が繰り返された。宝暦３年(1753)の神事場芝居から禁止されたが、４年後の宝暦７年(1757)に緩和され、寛政３年(1791)に再び規制される。そうして、寛政９年(1797)六月朔日、「六ケ所神事場」の荒町毘沙門天祭礼から再び緩和され、以後、幕末まで緩和状態が続いた。

幕末まで歌舞伎は公式には演じられなかったため、「歌舞伎は相成らず、人形操の申し立てにて候間、江戸より(歌舞伎)役者が参り候ても、こし(腰)へ人形の面を附ケ、舞台ハ五人より出られ申さず」という状況であった(28)。

それでも東北地方の中では仙台の歌舞伎舞台は知られていたようで、文政八年(1825)の「諸国芝居繁栄数望」に、東方の役力士、大関、関脇、小結に中村座、市村座、森田座の幕府公認の江戸三座がつき、前頭 17 枚目(二段目右から８枚目に「仙台釈迦堂」が位置づけられている。これは東北地方の最上位で東北は他に三段目左端に「出羽坂田(酒田)」、「出羽山形」、「出羽米沢」が掲げられている(29)。

仙台の操芝居(歌舞伎) 注 27 文献より

ここには東西 132 か所が挙げられている。多いのは江戸・大阪・京の三都と地方の城下町である。三都等では寺社境内から離れた芝居小屋もあるが、寺社境内や門前も 32 か所、約 24%あり、地方の芝居小屋が神仏と分離する過程であることが見て取れる。

諸国芝居繁栄数望(国々芝居繁栄相撲)　文政八年(1825)　注 ~~27~~ 29 文献より

東方２段目右から８枚目に「仙台釈迦堂」、東北地方は他に東方３段目左端に「出羽坂田(酒田)、「出羽山形」、「出羽米沢」がある。

注

(1)渡辺京二『逝きし世の面影』平凡社ライブラリー2005年、初版は葦書房1998年

(2)注1文献のp109

(3)注1文献のp18

(4)注1文献のp508

(5)注1文献のp87

(6)注1文献のp243

(7)注1文献のp239

(8)Edward Sylvester Morse "Japan Day By Day" 1917, Boston、邦訳は石川欣一訳『日本その日その日(上・下)』科学知識普及会1929年、のちに平凡社東洋文庫全3巻(171・172・179)1970年・1971年

(9)注1文献のp239、及び石川欣一訳『日本その日その日1』平凡社東洋文庫1970年p21・22

(10)磯野直秀『モースその日その日ーある御雇教師と近代日本』有隣堂1987年p311

(11)注1文献のp532

(12)注1文献のp532

(13)注1文献のp532

(14)注1文献のp526

(15)注1文献のp529

(16)注1文献のp526

(17)注1文献のp526

(18)注1文献のp543

(19)多くの芸能が寺社で演じられるのは、神事・法要の場で神仏を楽しませるために演じられることが多かったことに由来しているとするのが藝能史的な考察である。この法楽としての芸能を参加者が神仏とともに見ることが交感・交歓に結びつくと思われる。

(20)この項は、水野沙織『仙台城下の芸能事情』国宝大崎八幡宮仙台・江戸学叢書18、2013を参照した。

(21)宮城縣「奥陽名数」『宮城縣史32(資料篇9)』宮城縣史刊行会1970年p100

(22)注21文献のp92

(23)仙台市史編さん委員会編「仙岳院日鑑 文政十年二月条」『仙台市史資料編3 近世2城下町』仙台市1997年p496

(24)平重道編『仙台藩史料大成 伊達治家記録十 肯山公治家記録全書後編』宝文堂1977年p417

(25)吉田正志監修『源貞氏耳袋12「九十三 芝居御免の事」』「源貞氏耳袋」刊行会2008年

(26)仙台市博物館蔵「宝暦大留自紀」『河田家文書』宝暦二年九月廿日文書の別紙書立、引用は水野沙織「宝暦年間の興行事情ー宮町での角力・操芝居ー」『市史せんだいvol.13』2003年p78・79

(27)福井保解題「視聴草六集之四 陸奥ふり」『内閣文庫所蔵史籍叢刊 特刊第二 視聴草第五巻』史籍研究會出版、汲古書院発行1985年p261

(28)船遊亭扇橋「奥のしをり」1841年『復刻奥のしをり』アチックミューゼアム彙報第21、1938年p3

(29)庵逧(あんざこ)巌「文政八年板〈諸国芝居繁栄数望〉」『藝能史研究』第20号1968年p60